

【プロジェクト名称】

地域における大学を核とした芸術文化創造のための教育実践研究 -学校教育と社会教育の連携をめざして-

【研究組織】

- 松尾 大介 芸術・体育教育学系准教授（彫刻）
研究の総括及び造形的芸術文化活動の実施及び調査・教材開発
主に、子ども、一般市民対象
- 阿部 靖子 芸術・体育学系教授（美術科教育）
造形的芸術文化活動の実施及び調査・教材開発
主に、子ども、教員対象
- 平野 俊介 芸術・体育学系教授（器楽）
音楽的芸術文化活動の実施及び調査・教材開発
主に、教員、一般市民対象
- 上野 正人 芸術・体育学系准教授（声楽）
音楽的芸術文化活動の実施及び調査・教材開発
主に、子ども、一般市民対象

【研究プロジェクトの概要】

初等・中等教育においては芸術科目の授業時数が減少し教員も削減されており、学校教育の中で次代の文化を担い創造していく子どもたちをしっかりと育てているとは言い難い現状がある。反面、社会教育における芸術教育は、その多様なニーズとともに重要な役割を持ち、特に高齢者にとっては生きがいにもつながる意義深いものとなっている。芸術系教員は、そのような地域の芸術文化教育活動に日頃から参加し、様々な援助や指導を行っている。学校教育についてももちろんであるが、地域社会においてその独自の文化を高めていくことは、地域の教育文化の核として本学が果たす重要な役割であるといえよう。

そこで、本研究は、学校教育と社会教育の両方を視野に入れ、その関連を重視する芸術教育のあり方について、実際の芸術文化教育活動を通して考えていくことを目的とする。学校自体が地域社会との連携を図ることで、その閉塞的状况を打破しようとしているように、学校教育での成果と社会教育における成果が有機的に統合され、補い合うことで、地域での新しい芸術教育の形を模索することが

できると思われる。

本研究では、上越市・妙高市を中心に、本学芸術系教員がかかわっている地域での活動を分類整理し、その目的・方法などを分析しながら、それらの教育的活動を学校教育へ発展させるために、あるいは、逆に学校教育に関して行っている援助を地域社会へ発展させるために、それぞれ有効な方策について検討する。例えば、子どもたちとのワークショップを含む信州大学との合同展（松尾）、子どもの文化体験プログラム（上野・松尾）、パブリック・アート（阿部）、教員を含む一般市民へのピアノ実技講習（平野）など、地域の人的・物的素材を掘り起こしながら独自の文化を高め発信する活動（各種発表や実技指導講習、ワークショップやコラボレーションなど）の成果を、まず学校教育へ発展させる教材や方法を検討したい。具体的には、映像メディア・CD・冊子などの副教材や資料として提供する。またそれをもとに学校教育において実践がなされることで、逆に地域の文化へ相互作用的に影響を及ぼしていく、というような実践研究を試みる。それぞれの場面で評価活動を実施し、フィードバックさせながら、多様な実践を蓄積していきたい。また、教員養成系大学生という地域にとっての重要な人的財産を活用するとともに、実践に参加した学生が自らの教員としての資質向上に役立つよう、本学学生の社会性を積極的に高めるための実践研究としても本プロジェクト研究を位置づけたい。

【プロジェクトの経過】

平成20年度は地域社会におけるワークショップなどの実践を行い、その成果と課題に基づき、21年度にはワークショップなどの実践を拡大するとともに、学校教育との連携を図り、学校教育での実践の可能性について検討した。

【プロジェクトの成果の概要】

本プロジェクトの最も大きな成果は、地域における実際のワークショップや指導などを通して、地域の芸術文化創造に寄与することができた点と、そこでの子どもたちの学びが学校教育における学びと重なりながら、新しい教育の可能性を探ることができた点である。さらに、本プロジェクトで作成した芸術鑑賞パンフレットは、実際の学校教育現場ですぐに活用できるものであり、今後の教育実践が見込まれる。

このようなプロジェクトを、単にイベントとしてではなく継続的に学校教育との連携を図りながら実施することは、学校教育では十分行うことのできない学習活動を補えるだけでなく、生涯学び続ける人を育てるという社会教育の面からも重要なことであると考えている。

【本プロジェクトの実施状況と得られた成果】

1. 上越教育大学・信州大学合同美術展覧会

(1) これまでの活動の経緯

平成14年、上越教育大学と信州大学に互いの交流を促進する連絡協議会が設置され、教育・研究の充実を図ることとなった。両大学の美術教育研究においては、信州大学教育学部美術教育講座藤田研究室と上越教育大学学芸系コース（美術）松尾研究室を中心に「美術ならではの学生間の交流」という発意により、合同美術展覧会が企画された。本展覧会は、お互いに刺激し合う学生たちの実技能力の研鑽を目的とするのは言うまでもない。同時に重視すべきテーマとして、地域への作品発表を通じ、市民の人々や学生自身が、美術の果たす役割や生活との結びつきを実感できる場の提供を目指した。そのようなテーマのもと平成16年度から、学生が主体性をもって活動の企画・運営に従事し、新潟県上越市高田の町屋、長野県須坂市の繭蔵、動物園等、互いの地域の特徴的な場所を会場としながら、作品の展示や小学生対象のワークショップ等を開催してきた。本プロジェクトでは、平成19年度までの合同展の経緯を踏まえながら、20、21年度の活動及び研究を行った。これまでの活動内容は以下のとおりである。

第1回「カタチノマワリ～カタチノワ～」

日時 2005年3月8日(火)～3月14日(月)

会場 善光寺外苑「西之門よしのや」、松葉屋、朝陽館

内容 ①酒蔵等、歴史的建造物の空間の特徴を生かした会場による立体造形の展覧会



第2回「カタチ×マチヤ」

日時 2005年10月3日(月)～10月10日(月)

会場 きものの小川、旧高野麻店、佐藤惣呉服店

内容 ①上越市高田の町屋、雁木通り等、歴史的建造物や地域住民の生活空間を会場とした立体造形の展覧会

②一般市民対象の造形ワークショップ（第7回花ロード出品作品制作）を通じた地域交流



第3回「くらすかたち」

日時 2006年12月1日(金)～12月10日(月)
会場 須坂クラシック美術館、ふれあい館ま
ゆぐら、笠鉾会館ドリームホール、
須坂小学校

- 内容 ①まゆ蔵等、地域の特徴的な空間を会
場として、小学生の作品を招待展示
した美術展覧会
②須坂小学校4、5年生対象とした造形
ワークショップ（和紙作り及び和紙
による照明の制作、さきおりによる
布の制作）



第4回「SUZAKART2007 ～柵の外からこんに
ちは ようこそアートな動物園へ」

日時 2007年11月21日(水)～12月2日(水)
会場 須坂市動物園

- 内容 ①動物園の特徴を生かした美術展覧会
②須坂小学校児童及び一般市民を対象
とした造形ワークショップ（動物を
モチーフとした巨大折り紙による制
作、紙袋を用いたお面作り）

第5回「動物園でアート発見！」

日時 2008年11月8日(土)～11月16日(日)
会場 須坂市動物園

- 内容 ①動物園の空間の特徴を生かした美術
展覧会
②一般市民を対象とした造形ワークシ
ョップ（未来の自分自身に宛てた葉
書の制作）



第6回「上越教育大学・信州大学 合同美術展
覧会」

日時 2009年12月14日(月)～12月20日(日)
会場 上越市 市民プラザ

- 内容 ①美術展覧会
②研究報告書の作成及び発表



合同美術展覧会は、学生同士や地域の人々と美術表現を通じた交流を図るべく、長野県善光寺門前町の酒蔵等、歴史を刻んだ味わい深い会場ではじまった。美術館や画廊と異なり、美術作品の展示のために設計されていない酒蔵等での展覧会において、その空間の価値の再認識や、新たな提示が意図された。学生たちは展示に向け、制作の手を動かしながら、蔵という空間を思い浮かべ、そこに相応しい色、形等の試行錯誤を繰り返したはずである。さらに、制作の手を置き、実際に展示する段階でも、何度も作品の位置を調整しながら自己の表現を引き立てる空間を探したのであろう。ゆえに作品には、自ずとその場について巡らせた素直な思いや新たな発見が投影されたようである。端的に言えば、場と作品との相互作用による、その場でしか形成されない固有な表現が魅力となった。そのような魅力への思いは、第2回目の上越でも引き継がれ、よりいっそう地域の特徴的な空間と美術とが一体になるよう、個人の町屋、雁木を提供していただくこととなった。上越の自然と生活に即して形作られた雁木の連なりや、町屋のおおらかな吹き抜けには、心地良いリズムや趣深い空気を感じないではいけない。雁木、町屋は、私たちの生活感情に呼応する美術作品のようにも思える。そのような、今まさに生活の営みとともにある歴史的建築で学生作品の展示の企画を立ち上げた当初、家主の方には理解し難い内容もあった。しかし、展覧会に向け準備が進むにつれ、家主の方をはじめ近隣の方から親密なアドバイスや協力をいただくことできた。展覧会を通じて町屋や雁木に美術表現をアプローチさせていく一連のプロセスそのものが、学生や地域の方々の町屋や雁木への思いの広がりであり、共有であった。そのような思いの広がりには、以下の学生の言葉にも垣間見えるように、第3回以降の須坂小学校や動物園等での展示やワークショップ等の活動でも共有されていった。

…動物園内の一面でおめんづくりのワーク



ショップを行った。…私たちは子ども向けにこのワークショップを企画したが、子ども以上におめんづくりに没頭している親や大人の姿も見られ、非常におもしろかった。もちろん子どもたちにも楽しんでもらえたみたいでよかったと思う。このワークショップが自分の考える「ふれあいの場」となって学生、子ども、親、地域の方々をつなげる役割になったのではないだろうか¹。



造形表現による「ふれあいの場」に集う人たちは、そこに相応しい色や形を考え、作りながら、それぞれの作品のいろどりを楽しんでいく。そのいろどりの広がりの中で、その時、その場所への思いを深めていくのであろう。



(2) 合同展を通じて得た成果

合同展の活動は、学生の精力的な活動と諸機関の支援により、地域連携を視野に入れた特徴的な活動として次第に認知され、評価も受けるようになった。しかし、第5回を終えたあたりから、学生の間で「美術表現という原点に立ち戻りたい」という声も聞かれるようになってきた。信州大学藤田准教授の「作品を発表すること以上にイベント性が強くなり、本来、学生たちが作品制作の中で身に付けなければならない造形への意識を弱めてしまったことも確かであった²。」という指摘のように、行政機関等との連携は、活動を大いに広く展開させたが、反面、諸機関からの要請と教育実習等の学生たちの日々の多忙さ等の諸事情が、一人の若者として表現に向き合う十分な時間と意欲を制限してしまったかもしれない。

学生たちの言う「原点」とは、単に後戻りしようとする消極的な考えからではない。5年間の活動の経験を積み、自己の表現を客体化して省みつつある成長の表れであろう。周知の通り、美術は様々な制約から外され、自由に創作できる一面があり、また表現された個々の作品に対する見方も鑑賞者の自由である。しかし、個々の制作者の手を離れ、発表される作品は、ささやかな感情から始まったとしても、個人的な趣味趣向ではない。表現内容の完成は、作品制作そのものに終わらず、作品と鑑賞者との間に交わされる「対話」をもって仕上げられる。表現とは制作者の安易な押し付けではなく、いわば「不断の問いかけ」であり、ゆえに自己に向き合う「問い」の質が重要となる。学生たちは、自ずと様々な人との「対話」の繋がりに支えられている美術表現の責任を、合同展の積み重ねで実感してきたにちがいない。

¹ 藤井 俊「彫刻を教材とした鑑賞教育」上越教育大学学校教育学部卒業論文、2009、p.21

² 藤田英樹「合同展覧会に寄せて」『2009 上越教育大学 信州大学 合同美術展覧会 研究報告書』上越教育大学芸術系コース「美術」松尾研究室、2009、p.2

表現とは「誰に、どのような『問い』を投げかけるか？」が重要である。その問いが、人目を引く声高なものでなくとも、制作者それぞれの日常の生活感情に基づく、素直で切実な試行錯誤であるならば、作品の前で立ち止まる人も、ともにその問いの答えを探し始めるであろう。そのような、美術表現に備わっている「対話」の意義を再確認すべく、第6回目の合同展では、ワークショップ等の活動を並行して行わず、シンプルな作品展示を充実させることに集中した。そして、自己表現を客体化できつつある学生の成長を踏まえ、本展覧会の機会に、学生たちに、それぞれの研究の目的と成果を明確にすべく、「自身の表現」についての論考を課した。言うまでもなく、感覚的な思考を色や形に形象化していく作品づくりを客観的な言葉にすることは、極めて困難である。



自分の感情がどのようなものであるかを、それを表現する方法を見つける過程でのみ発見するのだとすれば、彼らはどの感情を表現すべきかを決定することから表現の仕事を始めるわけにはいかないのである³。



というコリングウッドの適切な指摘に従うならば、客体化されるべきは、観念的なテーマやメッセージよりも、制作者自身の感覚を自身の目と手で確かめていく試行錯誤のプロセスであろう。そもそも、美術作品の端的な説明には、それほど意味があるようには思えない。それよりも、学生たちの表現に内在する、それぞれの世界に向かう際の複雑さ、そしてそれに向かおうとする意志の共有を重視すべきであろう。なぜなら、そこに美術表現固有の根源的意義として「考える存在としての人間性⁴」が確認できると思われるからである。妙高市特産の千草石による石彫に取り組んだモンゴルからの留学生は、



³ コリングウッド「藝術の原理」(山崎正和、新田博衛訳)『世界の名著 続 15 近代の藝術論』中央公論社、1974年、p.311

⁴ 同上書 p.380

論考の中で

作品「生・命」を長い時間かけ、石に向かって、カーン、カーン、コン、コンと同じ動作を繰り返した。それは、私の考え（イメージ）と石の形の中にズレがあったからである。「生・命」を彫るといふこの過程にはズレがあり、リズムがあり、新しい形があり、深い意味がある⁵。



と記した。本作品が彼の内にイメージされた対象の単なる再現物ではなく、表現される石との試行錯誤の実体験があってこそ作り得たことを共感させてくれよう。

将来、子どもの前に立ち造形活動を支援するであろう学生たちが、子どもの作品の意義を理解したいと望むならば、まずは自身の表現について語れるようにしておきたい。「なぜ図画工作や美術という教科が学校にあるのか。何のために教師は美術の授業に取り組むのか。」そのような質問を受け、答えに窮することもある。その際、自身の「つくること」に立ち返って子どもの姿を見れば、その内的世界の広がりや複雑さに思いをはせる一助となる。そして、色を重ねた一点一点の筆の跡、粘土をつまんだ指の圧痕に、子どもたちのかけがえのない思考の跡を認めることができるであろう。

第6回目の合同展では、各学生の作品とあわせて自作についての論考を報告書として会場に展示した。学生の「ラミネートにした作品の紹介文があったため、お客さんがより時間をかけて鑑賞することができ、また、こちら側とコミュニケーションをとる、良い媒体となったと思う⁶。」という感想が、本展覧会で地域の方々と学生の間に関わされた対話の様子をうかがわせる。美術表現がコミュニケーションの手段ならば、作品の主義主張の押し付けよりも、色や形を通じて考え、お互いに語り合い、共有していく時間そのものを大切にしたい。学生たちもこのことを十分に理解し、作品の制作と論考の執筆に懸命に取り組んだようである。そもそも、表現にはあらかじめ用意された自明の答えはない。「…普段の生活の一部としてのつくる行為の中で生まれたものを出せたことは自分としても良かったのではないかと思う。自身の中で再考を重ね、問い掛けた時間は自分にとっても貴重な時間だった⁷。」という学生の言葉のように、それぞれの生活から、それぞれの手法を探しながら、答えをゼロから立ち上げようとする学生たちの問いとしての表現が、様々な人との対話を豊かにした。さらにその対話が、それぞれの人のそれぞれの生活の色や形の再確認や発見への契機となるに違いない。そのような意志と思考のプロセスそのものが、心のふれあいや、多様性を受け入れる土壌の一部を形成するであろう。そして、その土壌において、はじめて

⁵ 包格楽吐『「生・命」』『2009 上越教育大学 信州大学 合同美術展覧会 研究報告書』上越教育大学芸術系コース「美術」松尾研究室、2009、p.43

⁶ 2009 上越教育大学 信州大学 合同美術展覧会の終了後に寄せられた感想から

⁷ 同上の感想から

表現する者は自らを肯定するだけでなく、日常生活の地域、社会への愛着をも育くむように思えるのである。

2. 子どもの文化体験プログラム

(1) プログラムの概要

本プログラムは、妙高市文化ホールを運営する財団法人新井文化振興事業団（以下、新井文化振興事業団と記す）と本学芸術系コースとの協働による事業である。新井文化振興事業団は平成 16 年より地域文化の「拠点」となるべきホールとして、また将来の文化活動の担い手の育成を目的として本プログラムを実践してきた。しかし、このプログラムが単発的で、市民を本来の目的である芸術文化への興味を喚起させるにいたらないなど当初の計画通りにいかなかったことから、支援の申し出が本学によせられた。そこで、この企画を立てるにあたり一方向的な大学からの支援ではなく、お互いの持つ人的・物的資産を活用し、協働することにより発展的な企画にするべく立案を行った。また同時に、学生の積極的な参加を促すことによって日ごろ学内では学ぶことのできない社会教育の場を提供することも活動の目的とした。平成 18 年度は音楽コース上野研究室が主体となり活動を行ってきたが、19 年度から、より広い総合的な視野から芸術を捉えるために美術コース松尾研究室との共同で行うことにした。本報告書では平成 20 年度からの活動について報告を行う。

(2) 平成 20 年度の活動

平成 20 年度は「石に挑戦！彫って、叩いて楽しもう！！」と題し、石彫とリズム音楽の創作を行った。活動の期間は 8 月 3 日から 8 月 10 日までとし、最終日は成果の発表会とした。

まず「彫るぞ！」と題し、妙高市特産の「千草石」を用い、友達や身近な動物などを彫り出す石彫を行った。硬いと思っている石が、ちょっとしたコツで割れてしまう「石割り」の体験も行うなど、郷土に伝わる素材に触れながら自由な創作を行った。

続く 8 月 8 日、9 日は「叩くぞ！」と題し、千草石の上を平に削った「石の太鼓」や、千草石の表面を覆っている「石の皮」をぶら下げた「石琴」を使って、いろいろなリズムを創造しながら一つの音楽作品の創造を目指した。子どもたちには、まず自分たちが作った「石の太鼓」や「石琴」あるいは「石のかけら」をハンマーやノミ、石同士などをぶつけることによって、どのような組み合



わせがどのような音を作り出すのか、自由に活動させた。

次に、グループ分けを行い、各グループで一つの音楽作品を作るよう指示をした。子どもたちは、音楽というとすぐに楽譜を創造するが、ここでは「音楽の設計図を書こう」と呼びかけ、各グループに模造紙とクレヨンを渡した。ここで子どもたちはどのように書けばよいのか迷っていたので、「絵を描いてみるのはどうか」と声掛けをした。すると、どのグループも夏休みの思い出などを出しあいながら「夏祭りの花火」など具体的なイメージを描き始めた。そしてこれをいかにして石を叩くリズムで表現できるか考え始めた。それぞれのエピソードや情景にあった音を創造しようと、そっと叩いたり、石同士をこすり合わせたり、組み合わせを変えながら工夫を行っていた。

最終日は、「石って意外とオモシロイ！」ということで、まとめの発表会を行った。まずはじめに、自分の制作した「石彫」の説明と感想を述べ、最後にグループごとに「音楽の設計図」を提示し、演奏を披露した。



(3) 平成 21 年度の活動

平成 21 年度は、「手とからだで音を創ろう！！」と題し、粘土によるオブジェの創作、ボディパーカッションとハンドベルを使った演奏を行った。活動の期間は 8 月 6 日から 8 日までとした。

まず、「おとのかたち」と題した活動を行った。これは、子どもたちに目隠しをした上、さまざまな楽器の音を聞かせ、見えない状態のままで聞こえた音のイメージを粘土で表現させた。楽器はトロンボーン、ピアノ、声楽（テノール）、太鼓（クイッカー）、鉄琴を用いた。子どもたちは音が聞こえると「これはトロンボーンだ」という具合に具体的な楽器名を出して興味を示した。そして、手の感触のみに頼りながら、聞いた音を粘土で形作った。この段階でどのように音というものを具体的なかたちに置き換えるかに苦心していた。ある子どもは、長く伸ばされた音に反応し、粘土を長く伸ばしたりしていた。次に目隠しをとって、「こ



れまでに作った音のイメージを集合させよう」という言葉がけのもと、それぞれの音を思い出しながら自由な創造でオブジェを制作した。

2日目は「カラダガッキ」と題し、ボディパーカッションの活動を行った。これは、従来の楽器のように音楽を演奏する上で障害となる奏法習得の困難さや読譜の難しさを感じることがなく、手軽に音楽に親しめることから、すでに教育の現場では取り入れられている種目である。ここでは、からだのいろいろな部位を叩く強さや速さなどを変え、一定したテンポの中で同じパターンで叩くとリズムが形成されることを感じていた。後半には、ハンドベルを用いての楽曲の演奏を行った。ハンドベルはその演奏法から「叩く」行為の延長上に当たると捉えることができる。子どもたちには楽器の繊細さや扱う上での守るべき事項を伝えたいうえで、担当の音を決め練習を始めた。子どもたちはハンドベルの美しい音色に夢中になり、高い集中力を保って練習を行った。ここでは「思い出のアルバム」という曲を用いた。この曲は幼稚園あるいは保育園ですでに学んでいる曲であり、歌を歌いながら演奏を行った。

3日目は「カラダガッキ発表会」ということで、2日目に練習したボディパーカッションによる曲、ハンドベルによる曲の2曲を演奏した。どちらも高い集中力をもって行うことができた。

(4) 子どもの文化体験プログラムの成果と課題

これまでの活動を通して「子どもたちが普段の授業では学べない刺激的な体験をすることができる」を目標に、地域の素材や「ひらめき」などを大切に活動は大いに成果があったと考えている。通常の授業では時間数が足りないことと同時に、予算や人的な不足から踏み込むことのできない内容へと深める活動が可能になったと考えている。また、これらの活動に学生は、あるときは指導者、あるときは仲間という具合に親密な関係を築くことができ、ともに活動ができていたと感じている。

今後の課題としてあげられる点は、企画段階から学生を参画させることにある。それは、より広い視野で新しい発想が期待でき、また企画から参加することでより明確な目的意識を持って活動にのぞめるからである。そのためにも、4月の早い段階からワーキンググループを立ち上げ、活動をする必要性があると感じている。

3. 生涯学習としてピアノ指導法

社会教育における芸術教育は、その多様なニーズとともに重要な役割を持ち、特に高齢者にとっては生きがいにもつながるという視点から生涯学習としてのピアノ指導法を考察すること、及び地域社会の中で音楽文化を高める上で大学が果たす役割として、上越地域の音楽指導者たちの要請に答え子どもたちに演奏発表の機会を与え、それを通して子どもたちの音楽表現力の向上に寄与する方策を切り開くこと、この2つ観点からプロジェクト研究を進めてきた。

はじめの生涯学習の視点からピアノ指導法を考察する上で、何が問題点で、どのような課題に立ち向かわなければいけないのか、私が平成16年から今年度まで6年間に渡って一般市民を対象とした大学の公開講座「ピアノ入門」を受け持ったことが、大

きな契機となった。この講座ではグループ指導ではなく個人指導の形態をとったために、受講者は毎年6名程で年齢層も退職された70歳前後の方から20代まで大変幅広く、主に中高年の世代が多かったが、男性の受講者は毎年1~2名程度であった。(6年間に例外的に小学生も一人いた。)開講時期は4月から6月の3ヶ月間で、毎年必ず受講される方もいた。仕事を持っている、或いは家庭の主婦である大人の場合は、期間を限定しての実施が負担感を強いることなく、受講しやすさにつながったと思われる。受講者は自分の意志で受講を決めているため、ピアノに対する興味と関心は全員高かった。これまで弾きたいと思っても、仕事等に忙殺されてその機会がなかった、或いは子供時代にピアノを習っていたが子育てでまったくその余裕がなかった等、理由は様々である。

講座の中では、ピアノを弾き音楽に触れることと一つのことに集中し挑戦することで、生活する上での張り合いとやりがいを感じてもらい、一人ひとりのささやかな心の潤いに繋がってくれればと願い受講者と接してきた。講座を担当する中で、どのような教材と指導法が相応しいのか絶えず模索し考え続けてきた。6年間の経験から、これには個人差があり、一概にこの教材が最適だと言い切ることはできない。これまでにピアノに触れた経験のない退職された年代の方には、大学の1年の必修音楽の教科書に掲載されているバイエル教材を主体とした課題に取り組んでもらった。読譜についての理解はできても、実際に指と鍵盤を結びつけて身体感覚を会得して演奏することには相当苦勞されていたが、この段階を通り抜けられない限り先の発展はないので、お互いに根気と忍耐を持って課題に取り組んだ。3ヶ月の間にバイエルの課題を4~5曲仕上げるのが精一杯ではあったが、たとえ4~5曲でも弾きこなせたことが、この先の易しい楽曲に挑戦する素地を築くことにつながっていくと思われる。過去にいくらかのピアノの経験がある受講者には、レモ・ヴィンチグエッラによるペタース社出版のクロスィング・ボーダーズという教本を取り上げた。この教材はクラシックとポピュラーの境界線上のスタイルによるオリジナルなピアノ曲集であるが、全6巻あるうち数年かかって3巻まで習得した受講者もあり、十分に成果があったケースもある。最後は、子供のころピアノの練習に熱心に取り組んでいたが、長いブランクのあと大人になって再び取り組む場合である。このケースでは、自分が演奏したい曲をしっかり認識できているので、選曲は受講者に一任した。この3例のいずれの指導でも、忍耐と根気を持って、演奏上のポイントを分かりやすい言葉で伝えることを心がけた。各受講者とも私の指示をよく咀嚼して対応するように努めてくれたが、演奏に直結する身体感覚には個人差があり、もちろん演奏にすぐ反映できない方もいた。しかし、その時思い通りにできなくても、次回までに習得しようとする熱意は充分に感じる事ができた。そして、このことが、生涯学習としてのピアノ指導上の鍵であると考えられる。

もうひとつの取り組みは、地域の子供たちに舞台での演奏機会を与え、演奏表現力の育成向上に寄与する試みである。これは、「子供のためのアドヴァイスコンサート」として毎年11月に大学の講堂で、地域の音楽指導者たちが組織している上越音楽振興会の主催で、大学の音楽教員が全面的に協力する形で行なっており、昨年までに6回実施した。毎回ピアノを中心として弦楽器、管楽器、中学生たちによる各種アンサン

ブル等、活発に発表がおこなわれている。アドバイザーは大学の音楽教員が中心となり、演奏した一人ひとりの子供たちにアドバイスをを書いて渡している。この企画も会を重ねるにつれ、子供たちの演奏表現力の向上が感じられるので、今後も継続して子供たちが伸びていく過程をしっかりと見守っていき、その成果を検証したい。その中で地域に根ざした音楽活動と音楽に可能な地域貢献について研究を続けていくことが重要と思っている。

この2つの取組とも、5年以上経過してやっと今後の方向性が定まってきたように思う。指導やアドバイスがすぐに音楽力や表現力に直結するとも限らず、成果が現れるまでに長い時間がかかることのほうが通例であり、そこに至るまでには本人たちの自助努力と根気強い持続力が求められる。このプロジェクト研究で明らかにできたことは、大学の学部生、大学院生の指導にも充分還元し、この活動を忍耐強く継続するなかで、更に研究を深めたいと考えている。

4. 芸術鑑賞パンフレットの作成

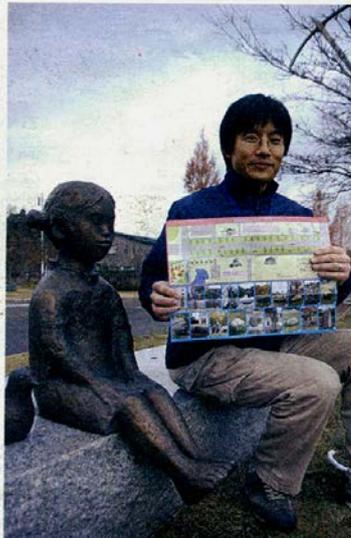
平成 21 年 12 月 15 日
上越タイムス

散策しながら楽しんで

大学前通りの彫刻紹介

上教大生ら
マップ作成

上越市の山麓線から上越教育大正入り口に続く大学前通りの遊歩道は、彫刻作品の並んでいる名物通り。同大で美術を専攻する学生らがこの遊歩道は、大学の関口としてだけでなく、地域の人が集う憩いの場、大学と地域を結ぶ架け橋の役割を果たしている。同大の松尾大介准教授は「ほと、作品十八個の写真や制作者の思いなどを紹介するマップカタチの域の人が集う憩いの場、大学と地域を結ぶ架け橋の役割を果たしている。同大の松尾大介准教授は」



「散策しながら彫刻作品のカタチ、空や雲、木の葉などいろいろなカタチを楽しんでほしい」と松尾准教授

彫刻は道路整備の完了した平成九年から、地域住民と大学関係者、行政の有志で組織するハブリック・アート推進委員会によって設置された。会員約二十人という同大院生や修士生の作品を毎年、一、二点ずつ増やし、安らぎのある文化的環境づくりを目指してきた。マップは作品に「から十八まで番号を付け、一

作成した教材用パンフレット

